

糠平 鉾山 三二一〃 四五〃
八田 鉾山 六〇三〃 二七〃

日高村においては、八田右左衛門鉾山、三井千露呂鉾山、石富(千栄)鉾山等があり、現在は休山しているが相当の出鉾をみた。また三石町における蛇紋岩からもクローム鉾を出したが、少量にとどまった。昭和十六年における日高管内の試掘権設定は次の通りであつた。

沙流郡	一三五
静内郡	七
三石郡	二七
様似郡	一四

八 クローム鉾業の躍進

一一三

第四編 新時代への歩み

一一四

九 工業の漸進

1 木材工業

日高の工業は、その豊富な森林資源に依存して発達してきた。遠く幕政時代に幌満に造船が行われたことや、西舎製軸(マツチ)所(明治二十九)奥山製軸工場(富川明治三十九年)などがあり、また一般製材は明治三十五年幌満に日高製材木工場、四十四年に冬島木工場などが操業を開始した。

大正十三年には様似村に幌満木工場、浦河町乳香、名古屋、向別の各木工場、三石村歌笛木工場、新冠村峰村木工場、佐瑠太村衣川木工場等をかぞえ、主に板角に製し樹種によつては足駄藪、下駄樺或は桶板鉛筆材等にして移出した。その額は凡そ二十万石内外であつた。

昭和二年佐藤真一郎が平取に木工場を開き、昭和七年石崎嘉一郎が芽生に造材所を設け、十年に荷負に移つた。昭和九年成田長次郎は平取に合板工場を設け、のち吉田豊八に譲つて吉田ベニヤとして一時活況を呈したが、間もなく経営難に陥つて閉鎖した。石井春雄は昭和十三年ころに製材工場を営み、家具その他の加工業をおこなひ、また札幌に工場を設けて軍納入品等によつて大いに発展した。更に昭和十八年には本州方面の資本を導入して富川に石井合板工業株式会社を設けて軍需に応じ、発展の波に乗つた。富川では古い衣川木工場は閉鎖して谷崎木工場が出来た。石井合板は終戦と共に閉鎖したが、岩倉組木工場として製材及び合板を営み、現在従業員約百名を擁している。

静内に木工場がはじめて出来たのは昭和二年で、後静内製材会社が一般材及びインテ材の製材を営み、池内ベニヤもできた。現在従業員一五〇名に及び、合板の大部分を東京に移出している。また同所の日高物産株式会社は、バット、スキー、薄経木等を製作し

ている。昭和二十七年にはバット三万本スキー五千台を造り、原材の一部は北見に求めている。

三石においては大正十年小鬮木工場が築足したが、同十二年清水木工場松山木工場が生まれた。

昭和五年三井物産株式会社木材部が横似に駐在し、造材と共に木工場をも経営した。昭和八年池内宇太郎は幌満に合板工場をたて、約四十五人を使用し操業した。現在横似には早坂ベニヤ工場があり、昭和二十七年の生産高は金道二合板工場中第三位を占める有力なものである。鬼頭木材工業株式会社は横似に第一第二工場を有し、製材責換を行っている。

2 醸造業

酒は米と共に移入品の代表的なものであったから、古くから地酒がつくられていた。またアイヌ、農漁村民を相手とする商家も、酒の販売をもつて各地に入りこみ、やがて地方有志となつた例もすくなくない。明治四十年静内酒造株式会社ができ、大正元年には門別に前川一家によつて沙流酒造会社が出来た。浦河では村岸助次郎が独立を以て明治二十五年ころから酒造をいとなみ、後本庄康平高津弥三吉らと組合を設けて専業を拡張したが、四十三年また個人専業とし、「蝦夷正宗」はようやく地方の名声を得るに至つた。三石では「三福正宗」が附近に商圏をはつた。大正十三年の管内統計によると年産二千七百石二七七、〇〇〇円を示したが、管内の需要を満たすに足らず多量な移入にまたなければならなかつた。

味噌は、かつて渡辺伊平等の製薬(豊畑)において農村加工業として製造され名声を得ていたが、大正十三年には門別に二工場があり年五千貫を生産した。たゞその製品は風味はよいが、色沢価格において内地産に圧倒されて年々減産の傾向にあるのは残念である。醤油は大正十三年門別静内狭伏浦河に四工場あり、その製品は佳良で、大正九年八百石、十一年一千石、十三年九三〇石を示した。

3 東邦電化株式会社

昭和十六年一月より、様似村に北海電気興業株式会社が珪素鉄製造事業を開始した。後社名を東邦電化株式会社と改め、電力は幌
九工業の漸進

第四編 新時代への歩み

満川の自家発電により、原料は後志大江、渡島福島上の国等の鉱山よりマンガン鉱石を、ヨークスは大夕張方向より、石灰石は横似産のものによつてマンガン鉄を製造している。昭和二十六年現在で年産マンガン鉄一、五〇〇屯、カーバイト八八三屯、石灰一、二九〇屯を示し従業者七五人、昭和二十七年はマンガン鉄に主力をおき一、七三四屯余の年産で、製品は日鉄日鋼に送られ、また一部はベルギー、西ドイツにも輸出された。

以上のほか、大正年間に竹細工・アイヌ細工等の手工業を奨励したが、あまり盛んにならず、また一時沃土製造をなすものもあつたが、原料昆布の販路が開けて、価格が引合わないうつたので衰退した。澱粉の製造は、大正九年二六、二六〇斤、十年七、〇〇五斤、大正十二年三五〇斤を示しているが、その後衰退した。これは第一次世界大戦の澱粉景気の一時的現象であつたと思われる。

乳製品工業については畜産の条につき、水産加工業については水産の条に記述することとする。